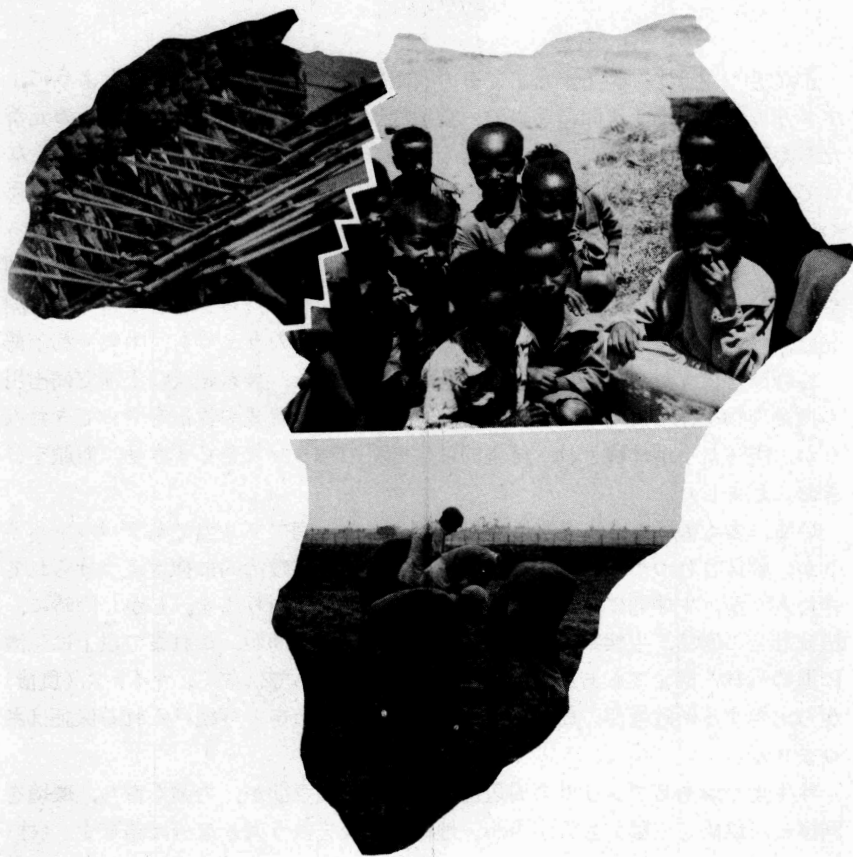


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.112

試 行 錯 誤



特集 アフリカの民主化

アフリカの民主化を考える	3
アパルトヘイトは終わっていない	6
南アフリカ調査報告	7
エチオピア民主化への道	8
アフリカキーワード 9	11
私たちの暮らしの中のアフリカ	14

地球社会の分岐路だ

JVCがソマリア、エチオピアでその政変劇を目の当たりにしてきたように、アフリカではこの1年間に9つの一党独裁政権が倒されました。これらの元首たちの論理は「遅れたアフリカが真の開発を遂げるためには、国中が一丸となっ
てかからねばならない。そのためには、中央から強い軍事力をもって押さえつけていかねばならない。さもなければ、部族主義により国がばらばらになってしまう」というものでした。しかしこの真の開発という名目のもとに、差別や国際的な依存・借金、そして砂漠化や『飢餓』をもたらしてきたのです。開発は、多くの国で人口の90%を越える周辺部に住む人々よりも、中央・都市部に住むひとにぎりの人々を優先してきました。また、最も肥沃な土地で輸出用の換金作物を作るために、自分たちが食べるために農業や牧畜をやってきた人々が、痩せた土地に移され、結果的に生態系のバランスをくずさせ、飢餓をひきおこしました。

いま、多くの国々で、多数政党制が導入され、南アフリカでもアパルトヘイトが、解体されつつあります。こうした民主化は、政治的に押さえつけられてきた人々が、主体的に意欲的に生きていく機会ではあります。しかし同時に、伝統社会の崩壊、生態系の破壊を加速する開発や援助が、これまで以上に急激に進められる機会でもあるのです。また、ゼロからではなく、マイナス（負債）から出発する新政権が、周辺部を犠牲にしない政策をとり続けられる保証はありません。

芽生えつつあるアフリカの周辺部に住む人々の意欲が、力強く育ち、環境を回復し、飢餓を克服できるか否か。地球の今後を占う大きな分岐路です。(林)





アフリカの民主化を考える

明治学院大学 勝俣 誠

アフリカ人にとっての民主化とは

北は地中海に面するアルジェリアから、南は希望峰のある南アフリカまで、東はケニアから西はカメルーンまで、アフリカを襲う民主化の嵐は当分おさまりそうにもない。

50以上の国からなるアフリカ大陸で、これほど多くの国がこれほど短期間に、民主化という社会変動を経たことはかつてなかった。

もちろん国によって、民主化の中身も、テンボも、方法も異なっている。ただ、共通しているのは、いずれの地域でも既存の権力を批判する自由と権力の交代を要求していることだ。つい最近まで「アフリカは貧しく、まず食べなければならないのだから、言論の自由、反対政党の制度はぜいたくだ」と、アフリカの開発を語ることがあっても、アフリカが民主化を望んでいることはほとんど話題にならなかった。

「アフリカに民主主義はいらない。まず食べなければいけない」一見説得力があるように聞こえるこの表現は、アフリカの普通の人々の生活を少しでも知っている者にとってはおかしいと感じるであろう。なぜなら、今日多くのアフリカの地域では食べることも自由に話すことも、ままならなくなっているからである。

開発を実行するにあたり、横やりがはいりすぎると人々は食べられなくなるとしばしば言われてきた。

しかし「自由よりも開発」という考えが、今日では逆になってきている。すなわち、人々が皆食べられるようになるには、より多くの人々の知恵とやる気が不可欠となり、これらの力を汲みあげるのが民主化であるという考えである。

民主化の中身は様々である。抑圧された少数民族は「自治や独立」を、権力の汚職を指をくわえてひたすら眺めてきた人々は「より公正な富の分配」を、時の権力と考え方が異っていたがゆえに拷問や亡命の憂き目にあった人々は「人権の確立」を、コネがなくて公職につけなかった人々は「より公正な選抜」をそれぞれ要求している。

こうした中で、今日のアフリカの民主化は西欧の考えの押し付けで、そのような輸入思想はアフリカ社会を混乱に陥れるだけだという人がいたら、少なくとも次の問に答えてもらいたい。

すなわち、膨大な汚職、人権の無視といった権力の濫用をこの民主主義という「輸入品」に頼らず、コネも金もない人々によってどうチェックすることが可能なのか。「アフリカの」解決があるとしたら、どんなものなのか。

私としては、民主主義にアフリカのとか社会主義的とか、革命的とかいった、形容詞はいらないと思っている。民主主義は民主主義である。それが輸入品で何故いけないのか。もし世界史に進歩があるとしたら、人々が自分たちのしあわせを作るのに適し

アフリカ民主化の動き

[1991年8月現在]

【コートジボワール】

1990年11月、複数政党制に基づく初の大統領選と議会選挙を実施。

【コンゴ】

一党支配から複数政党制への移行を決める。1992年に初の人民議会選挙を行う方針を決める。

【アンゴラ】

1990年一党独裁の放棄を宣言。市場経済導入等を表明。

【ナミビア】

1990年3月、南アの不法統治下にあったアフリカ最後の植民地が独立、複数政党制が導入された。

【エチオピア】

1991年6月、メンギスツ政権がEPRDFにより倒され、30年間続いた内戦が一応の終結を迎える。エリトリアは2年以内に、独立を問う住民投票を実施することが決まり、新政権側もこれを認める。

【ソマリア】

1991年1月、シアドバレ大統領の長期政権が倒される。国内は混乱し、今もアナキ状態が続く。

【ケニア】

1990年、一党支配に対する反発から大規模な反政府運動が起こる。モイ政権はこれを弾圧、複数政党制の導入も拒否。

【モザンビーク】

1990年、社会主義からの離脱を宣言。複数政党制による民主政治導入の新憲法を採択。

【南アフリカ】

1990年、ネルソン・マンデラの釈放、ANCの合法化。さらにアパルトヘイト法の廃止が決定されたが、黒人の参政権は依然認められていない。

た考えを、ある時は自力で、またある時は他の地域で発見し、それを学ぶ力を持っていたからであろう。

「アフリカの最近の民主化は輸入思想にもとづいており、アフリカ人に適していない」とする考えに特徴的なのは、一つに、そう発言する人がまさに非民主的な権力の恩恵を受けてきて、批判するどころか、続いてほしいという立場ににいることであり、もう一つは、アフリカ人は他の人々と違うというふうに認めていることである。

この後者の考えは、たとえば日本人に人権は必要だが、アフリカ人には当分不要であるとか、人権侵害による様々な苦痛はアフリカ人なら受けてもかまわないという結論に行きつきかねない。

だからといって、民主主義を一つのパッケージ化として定義し、それをクリアしたら民主主義に成功したと言うことではない。

人の支配から法の支配へ

一党独裁（アパルトヘイトの南アフリカの場合は白人独裁）が多くのアフリカ諸国で崩壊ないしその危機に瀕している今日、ともすると独裁者を追放すれば生活は良くなると考えられがちである。

しかし、この考えは一面的である。奴隷なくして主人が存在し得ないと同様、独裁政権を独裁的たらしめた要因も見ないことには、民主化を利用して登場するもう一人の独裁政権を生みかねないからだ。

安易な一般化は避けなければならないが、アフリ

カの場合、大まかにいって二つのことが指摘できるであろう。

第一は、欧米日が、国家主権の名において、アフリカ諸国の中で独裁主権による不正や人権侵害があることを知っていたにもかかわらず、援助を続けてきたことである。多くのアフリカ諸国は独立時から外国援助を前提とした国造りをしてきたため、この援助のチャンネルを独占することは、国内の人々の支配、そして蓄財を独占する絶好のチャンスであった。逆に言えば、援助する側が、相手国の不正や人権状況に敏感であったら、人々の人気をとっくの昔に失っているような独裁国は、とっくの昔にその国の人々の力によって倒れていたかもしれないのである。

実際、1980年代末のペレストロイカと東欧の民主化で、援助をもらう際のアフリカの地政学的意味は薄れてしまった。欧米ソが何が何でもアフリカを支援するという姿勢でなくなるや、ザイールやエチオピア、さらには旧フランス領の西アフリカの諸国の独裁政権が未曾有の危機ないし政権交代を生じている。

第二は、アフリカの人々の中には、独裁による弊害を、自分自身が多大な被害をこうむるまで良くないものと思っていなかった人々が多いことである。人々が国家元首に期待してきたのは、国家がどのくらい公正に富を管理するかでなく、どのくらい寛大に富を分配してくれるかであった。

そこで、元首は「あげる人」で、国民は「もらう

人々」という図式ができあがっていた。もっとも、「あげる」「もらう」の関係は、すべての「国民」に平等に確立していたのではなく、地縁、血縁などのコネにより著しく偏っていたことをつけ加える必要がある。

しかし、「あげる」ためにはどこからか資金を見つけておかなければならない。多くのアフリカの場合、この資金源は自国の石油、ウラニウム等の鉱物資源、カカオや木棉のような換金作物そして外国援助が中心で、天候や世界経済や政治の動向に大きく左右されるものばかりである。

かんばつが続いたり、一次産品の市況が低迷したりすると、ただちに分配する資金が目減りし、当然「もらう」人々の数や「もらう」量も少なくなる。そして、東西対立の時代が終わりアフリカの戦略的価値が減じられる中、援助も従来通り無条件にこなくなる。

そこで、従来「もらう」ことに慣れてきた人々は充分に「くれなくなった」元首や政府に見切りをつける。政府と「国民」の間関係はもはや人柄や寛大さではなく、民主主義という公開ルールによって規制したいとする法治国家への願望がでてきたのである。

「民主主義」の限界と新しい芽

以上の動きは現代アフリカ史においてプラスの側面を持つ。アフリカ人が、政治とは参加によってつくるものという実感を味わう貴重なリハーサルだからだ。

しかし、民主主義とはそれ自体が今日のアフリカの直面する様々な問題を解決してくれるものではない。もし、アフリカの今日の民主化に積極的意味があるとしたら、アフリカ人が自らの参加と責任のもとで、自分たちにふさわしい統治の仕方と中身を選ぶ糸口をみつけていくことである。

したがって、民主化が、参加と責任を問わず、自国の富の恩恵に従来浴さなかった人々の不満を別のパトロンの選出によって解消することを意味するとしたら、このプロセスはやがて以前の独裁政治時代と同じ問いにぶつかるであろう。

西アフリカで永らく NGO 作りを手がけてきたジャック・ヒュニクール氏は、こうした進行中の民主化の陥りやすい危険を次のように的確に指摘している。

「しばしば独裁者であった国家元首は、言わば伝

統的村落の村長のように支配した。おしゃべりの木^{注(1)}のもとで「民主的討論」の後、平和を維持するため自分の自由にできる富をもったいぶって分配するというやり方である。

しかし、まずは新聞、ラジオといったメディアが徐々に広まっていき、これらがかつての語り部^{注(2)}のように元首の「称讃」を始めた。この際限なき語り部方式の結果、この元首は何が起きているかを正確に見られなくなってしまった。彼は一族、派閥から浮いてしまった。語り部（私は彼らをごますり集団と呼んでいるが：註ビュニクール）はもらいすぎとなった。

いくつかの集団は当然もらうべきと思っている分け前をもらえなくなった。

そこで、彼らは民主主義と複数政党制を要求して、それでもっともらえることができるのではないかと期待し始めている。なぜなら、政党はしばしば一族派閥と結びついているからだ。その上、独裁者は分かたすべきケーキが大きい限りにおいて受け入れられていたのだ。このケーキが小さくなったので、全員を満足させるために十分なケーキが残らなくなってしまった。そこで町の若者や学校出の失業者やドロップアウトした“ルンペン若年層”は、約束が違うと言って、『民主主義をよこせ』と叫んで反抗し出した。そして野党は守れない公約をしてきているのだ。

ルネ・デュモン、『アフリカに民主主義を』

1991年

しかし、他方ではこうした民主主義の限界を乗り越えるには、危機を自分たちで考えて、人々を組織して行動していくしかないという自立的民主主義の試みが、スラムや農村や漁村で、いつの時代にも増して見られるようである。したがってアフリカというとすぐ援助のことだ、という考えをまず一回捨て去り、このささやかかもしれないが着実な自立、共同の実験をどこまでアフリカで発見できるのかがきわめて重要である。

注(1) 西アフリカの村の広場にはほぼ必ずといっていいぐらいあるパンの木などの高い木で、その木陰にすのこのような台をおき、上にすわって人々と討論するので、この名がついている。

注(2) グリオと呼ばれ、かつては王に仕えて主として王国の過去の栄光を語りつぐ役割を与えられていた。

アパルトヘイトは終わっていない

何が変わったのか

昨年2月11日、ネルソン・マンデラ ANC(アフリカ民族会議)副議長が28年ぶりに釈放されて以来、アパルトヘイト『改革』が“評価”され、サミット(西側先進国首脳会議)のお墨付きで各国が経済制裁解除を急いでいるが、いったい何が変わったのだろうか?

すべての南アフリカ人に人種の登録を義務づける人種登録法、人種別に住むところを規定する集団地域法など、いわゆるアパルトヘイト根幹諸法の「廃止」が進んだ。その中で、なんといっても黒人と白人の経済格差が決定的にしてきたのが土地法だが、これは総人口17%の白人が南ア全土の87%を支配するのを可能にしてきた。

3月、デクラーク大統領はこの土地法の代替案を発表したが、それは不平等を解消するものとは程遠い。過去、アパルトヘイト政策ゆえに強制移住させられた黒人(約499万人と言われている)に対し、何の保証も謝罪もされようとしていない。土地の再分配は、紛争・混乱を引き起こす可能性があるからというので、事実上拒否しているのである。しかも、わずか1万3000人の黒人農場主しか創出されず(一戸当り30~50haとした場合)、さらにこのような提案が黒人側の意見を聞くことなしに行われている。アパルトヘイト完全廃絶の実現まで、まだまだ白人政権への不信感は拭えない。

軍・警察に強権を発動させる国内治安法もまだ残っている。この法律によって学齢期の子供までが政治囚として逮捕・投獄されてきたのだ。

部族対立の真相

新しい社会の建設方法を巡り、今も多くの人の血が流されている。マスコミの多くはこれを「部族対立」と報じ、黒人同士は内輪もめをして殺し合っているという、間違った印象を与えている。この対立はアパルトヘイト政策そのものによって仕組まれたことを見極めねばならない。アパルトヘイトは黒人を民族・言語ごとに分断し、白人から分離することが目的である。

白人政権は特定の黒人民族集団に資金供給し、反

アフリカ行動委員会 松島 多恵子

アパルトヘイト勢力に暴力を仕掛けさせてきた。この組織はインカタ自由党と呼ばれ、軍・警察は武器援助も与えてきた。対立を生み出すことで「黒人には国を統治することなどできない」ことを『証明』するためである。『部族』による派閥構想が真実なら、なぜ政府は暴力を止めようとししないのか、とマンデラ氏は四月に来日したときに訴えた。



日本のなすべきこと

南ア経済を支える重要な貿易パートナーであるが故に、日本人は人種差別の上にあぐらをかく形で名誉白人という屈辱的な称号を与えられてきた。人口登録法の廃止によってその地位は自動的に消滅し、日本人の意思で、力で、この不名誉を返上することはついにできなかった。このことに何のけじめもつけないまま、将来対等な関係が南アと成り立つとは思えない。

経団連、金融機関など財界の南ア訪問や、スポーツ交流解禁のニュースが紙面を賑わしている。過去の日本と南ア関係を見た場合、人種間の不平等を縮める努力なしにこれからの企業進出は許されないだろう。4月に視察団を送りだした経団連国際経済部は、黒人の雇用条件・地位改善を盛り込んだ、企業進出ガイドラインを作るべきだというアフリカ行動委員会の提案に、「今までも真剣に議論されたことはない」と消極的な姿勢を示した。

一方、ANCは政治囚の釈放、一人一票の実現などを経てから段階的な制裁解除の要請をしたいとしている。「もう逆戻りはない」と周りだけが安心していても、そうではないと言っている人々の声を今一度真剣に聞く必要があるのではないだろうか。

南アフリカ調査報告

高梨 直樹

JVCとしての新しいプロジェクトの可能性を探るため、アパルトヘイトの国、南アフリカ共和国へ行ってきた。約2カ月の滞在の間、いくつかの問題が見えてきたが、ここではそのうちの二つを報告したい。

スクウォッターキャンプ

現在南アが抱えている最大の問題の一つに、七百万人をこえるホームレスの人々の問題がある。彼らは「スクウォッターキャンプ」と呼ばれるトタンで作ったバラックのスラムに住んでいる。このスラムがあらゆる都市の周辺に出現しているのであるが、私もソエトというヨハネスブルグ近郊の黒人居住区で、巨大なスクウォッターキャンプの群れを見た。そこに住む人々の中には、工場労働者や女中として働いている人もいるが、やはり失業者が多い。子供のための学校はなく、多くは貧困により子供を学校に行かせることができない。スラムの生活改善に取り組んでいるグループが中心になって、市と交渉して取り付けさせた水道もあったが、その水道も4000世帯に1つであり、その数は絶対的に不足している。衛生状態も非常に悪い。電気、上下水道、トイレ、保育所などの設備を必要としていた。

ところがホームレスの人々は、こうした基本的な生活条件に困っているだけではない。南アでは最近インカタという黒人組織による一般住民への攻撃が行われており、特にヨハネスブルグ周辺のスクウォッターキャンプが攻撃対象となって、毎日多くの死傷者が出ている。インカタは白人政府のかいらいであり、軍・警察からも襲撃のための武器を供与されているといわれている。私が南アに滞在していたときも、破壊され炎上するスラム、流血し倒れた人々の姿が連日テレビに映されていた。ソエトで私を泊めてくれたエリックさんは、「夜9時以降は車でも外出しない。撃たれる危険性があるからだ」と話していた。

ホームランド

南アといえば、警察隊の住民への発砲など都市部での弾圧は注目されてきたが、アパルトヘイト政策



の究極の形態である「ホームランド」の存在はあまり知られていない。ホームランドとは全国土のわずか13%にすぎない辺境の黒人居住地域のことである。87%の肥沃な土地は少数の白人に所有され、残されたこの不毛な土地において、黒人は10の部族ごとに分断され、白人政府が指名する統治者によって支配されてきた。ホームランドでは収入を得ることができないため、ほとんどの男性が鉱山などに出張に行ってしまう。そこで女性と子供が取り残され、彼女らは男性の仕送りを頼りに暮らすことになる。ホームランドの生活に耐えかねた人々の中には、都市へ出ていきスラムに住み着くケースも多い。

私はスワジランドおよびモザンビークとの国境付近のカンガルー、レボワ、ガザンクールという三つのホームランドを訪れた。そこでは、生活上の諸問題を解決し、経済的自立をすることを目的として女性を中心に結成された、東トランスバール女性連合というグループに出会った。このグループでは、農業、織物、れんが作りなどの自立プロジェクトを計画している。ホームランドで生活してゆくには、必然的に女性たちが力をつけていかなければならない。

デクラーク大統領によってアパルトヘイトの廃止が宣言されたとき、私はちょうど南アにいたが、変わった様子などまるでなかった。人々が直面している劣悪な生活環境の改善は、急務の課題である。今回の調査をもとに、JVCとしてさらに具体的な協力活動の内容を検討したい。

エチオピア民主化への道

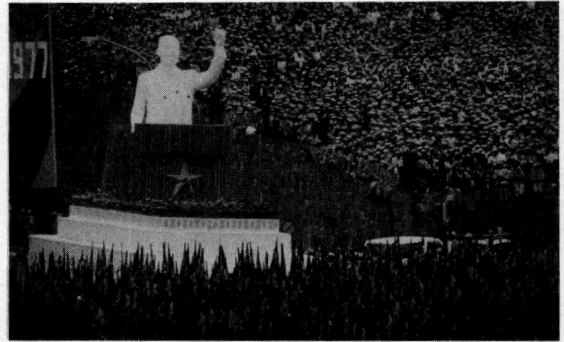
JVCエチオピア代表 山田 盛

恐怖政治の終焉^{しゅうえん}

14年間に及ぶ肅正と弾圧のメンギスツ政権は、5月21日のメンギスツ大統領自らの国外逃亡が崩壊への最後の一步であった。そして、28日未明のEPRDF（エチオピア人民革命民主戦線）のアジスアベバ侵攻わずか数時間で、1974年の軍事クーデター以後のデルグ（軍事委員会）支配に終止符を打った。30年に及ぶ内戦で疲弊し、メンギスツ大統領の逃亡で戦う意味を全く失っていた政府軍兵士は上官たちが逃走していった後、怒りと戸惑いの中に取り残された。メンギスツ大統領の後を継いだタスファイエ臨時大統領もいち早くイタリア大使館へ避難した。首都を制圧したEPRDFは国民に対し、デルグ支配の終焉^{しゅうえん}を厳命し、通常の社会生活の継続と秩序の維持を強調した。

民主化宣言

EPRDFはエチオピア全土の治安と秩序の回復、維持を進める一方、暫定政府樹立に向けて、国内外で活動する様々な政治勢力の参加、協力を求めた。さらに、それぞれの民族、部族の権利と自治は統一



に優先するとし、平和の維持と人権の尊重がエチオピア民主化への最重要条件であるとの基本方針を発表した。各国大使館に対しても、メンギスツ独裁政権下に破綻した経済の立て直しに向けての広範な支援と協力を求めている。また、複数政党制と市場経済の導入を政治、経済政策の根幹に据え、厳格な社会主義路線との決別を表明している。もちろん、理念と実践の間には、根深い民（部）族間の確執、天災、人災によって疲弊しきった農村、社会主義政権下で役人の間に蔓延した官僚的体質と賄賂の横行、そして独裁政権下の肅正と弾圧による人的資源の喪失等、困難な問題が山積みされている。しかしEPRDFの

解放戦線の勢力（内戦終結前）



EPLF（エリトリア人民解放戦線）



マルクス・レーニン主義から複数政党制と市場経済導入政策へ転換。マッサワ、アッサブ港を含むエリトリア州の分離、独立を目指している。

1970年に、同じくエリトリア民族によるエリトリアの独立を主張するELF（エリトリア解放戦線）から政策上の意見の食い違いによって分離、独立して結成された。

EPRDF（エチオピア人民革命民主戦線）



マルクス・レーニン主義政策から複数制政党制と混合経済政策へと転換。民族の自治、人権の尊重、民主政体の確立を目指している。

1988年にチグレ人民解放戦線（TPLF）、エチオピア人民民主運動（EPDM）などの反政府勢力4派によって結成された。

OLF（オロモ解放戦線）



民族の自治、独立を主張とし、目指している。1975年にオロモ民族によって結成された。

基本方針と、議長であるメレス氏の指導力に対しては、在エチオピアの国連機関、各国大使館ともに高い評価と期待を抱いているように思われる。

(メレス議長は7月24日までにEPRDF臨時政府によって、暫定政府大統領に任命された。新聞情報によると、同政府首相のポストをめぐり、EPRDFとOLF(オロモ解放戦線)との交渉が折り合わず、官僚人事選出が難航している様子である)

ゲリラ兵士の笑顔

アジスアベバを制圧したEPRDFの兵士は皆一様に若い。まだ12〜13歳の少年もいる。政府軍の空爆によって2歳で孤児となり解放闘争の中ゲリラ兵士の手で育てられた14歳の少年が、「早く郷里の村へ帰って学校へ通い、平和な家庭を築きたい」とはにかみながら将来の夢を語る時、ゲリラ兵士の闘争が権力奪取を目的とするものではなく、平和と人権の回復を目指したものであること、そして、その理念が末端の兵士にまで浸透し、彼らの精神的支えになっていることを感じさせられる。素朴な人間性が、戦場という極限的環境の中でも抹殺される事なく息づいていた。

アフロヘアーとサンダルはゲリラ兵士のトレードマークである。政府軍兵士から奪ったベレー帽をかぶっている者もいる。服装はばらばらで、一様に粗末である。軽機関銃で武装しているものの、軍服に身を包んだ政府軍兵士から受けた威圧感はない。緊張した表情の中にも幼さと無邪気さが残っている。

一般住民に対する態度はあくまで控え目で金品を強要したりすることはない。住民の理解と支持が闘争を勝利へ導く最強の武器であり、それなくしては勝利も解放もあり得ないとするゲリラ闘争における基本原則の実践である。この原則は解放後時間の経っている地方都市、村落においても、少なくともこれまでのところ一貫して守られてきているようである。それはまた、窃盗、賄賂に対し厳罰を処する態度にも表れている。

権力のわな

民(部)族の自治、独立を求めて始まった解放闘争は、1974年の軍事クーデターによる軍事独裁政権の樹立以降人権の回復、民主政体の確立を要求する広範囲な反政府闘争へと発展していった。その間一貫して住民の主体的な支持、協力を得ることを闘争の基盤とする一方、様々な反政府勢力との連帯が実現し、標榜する政治イデオロギーも教条的な社会主義から脱皮していった。それは政権奪取後のエチオピアの将来を視点に据えたものであり、その意味でエチオピア民主化に一歩の光明を見いだすことができる。

しかし、政権を奪取した後、好むと好まざるとに関わらず、彼ら自身が体制を成し権力を握ることになる。(権力には絶えず暴力と腐敗の芽が内在している)また、止むを得ざる選択であったとしても、平和・民主化を求める闘争そのものが最終的に武力に頼らざるをえなかったことには、彼ら自身自己矛

メンギスツのいないアジスアベバ

田尻真由美

しばらく歩いていると、あちこちにある、それまでカバレ(住民組合)の集会所に使われていた建物が刑務所代わりに使われていることがわかりました。徴兵や税金の取り立てなどを直接住民に対して行う役割を担っていたカバレの役員は、それまで権力によって住民に嫌がらせをしたりしながら、片方で賄賂を受け取るという甘い汁を吸っていました。その役員たちが刑務所に入れられ、オイヤネ(注)によって取調べを受けているのです。住民にしてみれば「いい気味だ」とでもいった思いでしょう。

5月28日のゲリラ軍の首都侵攻、制圧時にも「この機に乗じて略奪行為を働く者は、住民であれゲリ

ラ側、政府軍兵士であれ厳重に処罰する」といった放送をゲリラの指導者が繰り返したため、町では大きな混乱も起こらず、人々は少し安心した様子で、2日後には難なく通常の社会生活を取り戻したそうです。

……暫定政権が落ち着くやいなや「早く自分の生まれ故郷に帰って畑を耕さなければ」というゲリラの言葉に、「職をチグレ族に奪われてしまうのでは」と不安を抱いていたJVCのスタッフなどはすっかり気が抜けてしまったようです。JVCのスタッフの中でいま流行している言葉は「デモクラシー」。その言葉には恐怖政治からの解放感と、新政権への期待が込められているようです。

—エチオピア通信より抜粋—

(注) チグレ解放戦線のこと、山賊や強盗などの意味で使われていた。

盾があるだろう。解放闘争に自身の人生を捧げてきた若い兵士が、権力の落とし穴と自己矛盾の餌食にならないことを願うばかりである。

エリトリア独立への動き

EPLF(エリトリア人民解放戦線)は、エリトリアの州都アスマラを5月24日に攻略した。その直後エリトリア州におけるEPLF単独の暫定政権の樹立を宣言するとともに、同州を除くエチオピアにおけるEPRDF主導の暫定政権への不参加の意志を表明し、EPRDFはこれを承認した。そして、7月1日～5日にアジスアベバにおいて24の政治勢力参加のもとに開催された国民会議において、エリトリア州の独立を問う住民投票を2年後に行うことが承認された。(この会議にはEPLFはオブザーバーの立場で参加した)

この決定はアジスアベバ陥落以後、くすぶり続けてきたアムハラ族とチグレ族の反目に火をつけた。EPRDF内のチグレ族優位に対する危惧、エリトリアが分離・独立することによってエチオピアが内陸国になることに対する不安は、特にアジスアベバで支配層を形成していたアムハラ族の間に動揺をもたらすとともに、EPRDF主導の暫定政権への不信感に発展する危険をはらんでいる。EPLFが性急に独

立への地歩を固めようとすればEPRDF主導によるエチオピア暫定政権の安定が脅かされることになる。エリトリアではすでにチグレ語を公用語にすることによりチグレ族以外の民(部)族の居住が事実上困難になりつつある。(エリトリアにはチグレ族が多い)

民(部)族間の確執は、文化、宗教、伝統、慣習に深く根ざしており、長い歴史を持っている。また、それは特に、政治、経済政策が行きづまった時、それとすり替えられる形で表面化することが多い。さらに、感情的、抽象的な根拠に基づくこともしばしばである。根本的な解決には、十分な時間と慎重な対応を要する。

雑 感

エチオピアの人々は、その歴史、文化、伝統に高い誇りを感じている。長い解放闘争の主体となったゲリラ兵士と、彼らを直接・間接に支えた地域住民の抑制と禁欲の根幹を成したのも、この自負心であるように思える。しかしそれは時として、徹底的に非妥協的な態度をもたらし、また、過度の自己抑圧によって独裁者を生み出す危険性も持っている。まさに両刃の剣である。彼らの誇りが様々な困難を乗り越え、民主国家建設の堅固な礎となることを願う。

再びグリーン・フォー・アフリカ — マーシャ村

アジスアベバにある旧政府軍のキャンプから人を満載したバスが、北に向かって出発した。内戦のために家を追われた人や、徴兵で旧政府軍兵士として従軍していた若者たちである。

メンギスツ政権を倒し、新しい政府を樹立したEPRDFは、800万とも言われる飢餓被災民や難民への緊急援助を最優先課題に掲げ、国連やNGOの協力を要請した。同時に、新政権は国内の安定を進め、一部の地域を除いては平静を取り戻すまでに状況は回復した。

1991年7月3日。JVCは、実に1年半振りにマーシャ村を訪れた。内戦のために反政府ゲリラに占拠されて以来の訪問である。村の状況はどうなっているのか。植えたユーカリの木は成長しているのか。栄養失調で苦しむ子供たちは増えていないだろうか。様々な思いがスタッフひとりひとりの胸に浮かんでくる。

占拠直前に植えられたアダグイヤ地区の植林地帯をはじめとして、これまでの植林地帯は村人たちによって守られていた。家畜が入り込み若芽を食べてしまわないようにである。小さい規模ながらも苗木を育てている農民もでてきた。また、飲み水をきれいに保つために保護した泉の修復も行われていた。決して十分とはいえないまでも、農民たちが植林の必要性を認め、村人自ら問題解決に動きだした。その動きはまだまだ始まったばかりだが、農民のなかで何かの変化が起きてきたことは確かである。

このような農民の動きが村のなかにどう広がっていくか、外部からの援助が本当に必要なのか、村人自身からの民主化をどうとらえていくかといった課題があるが、この自発的な農民の動きを踏まえてJVCの活動を決めていく必要がある。JVCでは、国内の安定に伴い、ピチュナ、マーシャの各プロジェクト地を訪問調査するとともに、エチオピア国内の状況を把握するための調査を行っている。今後の状況によるが、農民たちの自発的な動きが見られたマーシャが、有力候補として考えられている。

アジスアベバから村を目指して帰っていく若者たちが、民主化の将来を担うことになるような国造りが行われるのを祈らずにはいられない。

アフリカ担当 江原浩昭

キー アフリカワード9

アフリカ…と一口に言っても、アフリカ大陸と同じくらい、広く多様な面を持つアフリカ。アフリカを知ろうとするとどこから手をつけていいのか分からない、途方に暮れてしまう…そんな人のために、まず9のキーワードをあげてみた。国名と同じくらいよく出会う言葉にまず慣れてみてほしい。

アフリカの自然

アフリカの角 (Horn of Africa)

エチオピア、ジブチ、ソマリアの三国の地域の別名。形がサイの角に似ているのでこう呼ばれる。この地域では国境を越えて同一民族が存在したり、ひとつの国にいくつかの民族が競合しており、内戦、民族独立運動が絶えない。その上、70年代から断続的に起こっている長期的な干ばつや経済危機等、混乱が続いている。(P12地図参照)

砂漠化

アフリカの地図を見ると、砂漠の占める面積の大きいことに気付く。中でもアフリカ大陸北部にあるサハラ砂漠は地球上最も広く、最も乾燥した砂漠である。その面積は東西5600 km、南北1700 km (アメリカ合衆国とほぼ同じ) に及び、アフリカ大陸の三分の一を占めるが、その面積は年々増加しているという。特にニジェール川沿いの砂漠化が進んでおり、2〜3年前までは港だった場所に風と共に砂漠が押し寄せ、港が無くなってしまい、すっかり錆びれてしまった町もあるというほど、アフリカの砂漠化は深刻な問題となっている。



撮影/佐久間 典子



ナイル川

アフリカ大陸東部を貫流する全長約6700 kmの大河。ウガンダのビクトリア湖からスーダン南部を抜けて流れる白ナイルは、エチオピアのタナ湖から発した青ナイルとスーダンの首都ハルツームで合流し、アトバラ川を吸収し、六つの瀑布を作り、エジプトの首都カイロの北で広大なナイル・デルタを形成し地中海に注ぐ。

水源地帯の雪解け水などの影響で、毎年周期的に水量の増減がある。エジプトのかつての栄華を支えたのはナイルの豊富な水であることは有名だが、成功の秘訣は水量の増減をうまく利用できた点であろう。ナイルの年間総水量は全国の日本人が5年間に使用する量にほぼ匹敵する820億 m³だがその80%が4か月間の増水期に流れてくる。青ナイル上流が走るエチオピア高原では青ナイルに沿ってすでに禿山になった土地から毎年70万トンもの土壌が流出し、上流には深刻な飢えを、下流地域には洪水と沃土をもたらしている。



サバンナとバオバブ

アフリカといえばサバンナ。チータが草原の中を走り抜け…というイメージを持つ人も多いのでは？アフリカの40%を占めるサバンナ。東アフリカのセレンゲティ国立公園にみられるように、草原、野生動物、そしてバオバブをはじめとする高木がサバンナの代表選手だ。

バオバブーその樹を見たことがない君でも、その名前ぐらいは知っているはず。そう、あの『星の王子様』にでてくる樹のことだ。その珍しい形はアフリカを知らない人にも有名だ。直径が10mにも達成する巨木も珍しくなく、根は50m四方にまで伸びる。しかし、最近アフリカを襲う干ばつの力はすさまじく、ニジェールのある村では1000年余りのバオバブ

の大木が枯れてしまったほどだ。印象的なアフリカの風景にも危機が訪れている。

ダイヤモンド

女の子なら誰でも憧れるダイヤモンド。アフリカがダイヤモンドの産地として有名なのは知ってる人も多いと思うが、ザイール、ボツワナ、南アフリカの3カ国だけで全世界総生産量の60%以上を占めるなんて驚きだ。ヨーロッパ資本が入り込み、アフリカの労働者を低賃金で搾取しているのは南ア産ダイヤモンド不買運動等で有名。ちなみに現在採取された原石はロンドン取引所に送られ、アムステルダム、ニューヨーク等で研磨され僕らの街に送られてくる。

アフリカの民主化

パン・アフリカニズムとアフリカ統一機構（OAU）

19世紀にアメリカ、カリブ海地域のアフリカ系の人々の間に起こった「アフリカ復権」運動。第二次世界大戦に至って、ガーナの初代大統領エンクルマ等のアフリカ人ナショナリストの手でアフリカに広められた。

1950年のパン・アフリカニズムはアフリカの植民地からの解放、及びアフリカの再生、統一を目指してきたが、1960年代に独立国が増加してくると国同士の利害が対立し、アフリカの政治的統合運動は挫

折する。しかしその思想は受け継がれ、後のアフリカ統一機構（OAU）の設立につながる。この国際機関は約50のアフリカの国が加盟し、アフリカ諸国の統一、独立の確立のために協力し合うよう設けられた。本部はエチオピア・アジスアベバにあり、いくつかの専門委員会を持つ。本部がエチオピアにあるのは、当時（設立は1963年）、エチオピアの皇帝ハイレ・セラシェがエチオピアをアフリカの中心にしたいと一役買ったためといわれている。

部族主義と民族紛争

アフリカには多くの『部族』（同一の言語や宗教、文化等を持つ社会集団）が存在するというが、この『部族』という言葉が人々の間に意識され始めたのは植民地時代になってからである。かつては細かい「小国家群」に分かれており、もっと大きな民族意識を持っていた地域をヨーロッパ人が植民地を統治しやすくするために「適当な」大きさに分断、統合した。その時に用いた「単位」の様なものであるとの見方が多い。

『部族』的な境界を作ることによって地域の人々が自分の『部族』を意識し、その一員として行動することを狙い、植民地の秩序と統合に結びつけたのである。時には反植民地体制の感情の爆発を避けようと、統治側が意図的に『部族』対立を促した例もある。植民地時代以前はゆるやかな民族意識しか存在していなかったというのであるから、この政策がいかにアフリカ全土に浸透し、定着したかが分かるであろう。

独立運動を果たしたアフリカ人リーダーたちが国家建設のプロセスで最初にぶつかるのが、この「植民地時代の亡霊」ともいわれる『部族主義』『部族意識』である。国としてのまとまりを強調すればするほど、中央政府に対する各『部族』の反発感情を誘発させることになり、分離独立運動さえ生じることにも少なくない。現在エチオピアで起こっているエリトリア州の独立運動、スーダンの民族紛争は顕著な例。一見内政問題に見える民族問題も、実は西側の大国がつけたつめあとなのである。

一党制と複数政党制

アフリカの国々の多くは独立に際して旧植民地宗主国のモデルに習って、議会制民主主義を採用した。しかし、新しい国の政治的な統一は、言語、宗教の違いや部族主義などの分裂要因によって、急速な達

成が妨げられた。そのため、国民を統合するのに強力な権力集中体制をとる必要が生じ、反政府活動の制限や禁止、一党制の採用へと進んだ。

一党制は野党の存在を認めておらず、そのために政府の活動をチェックする力が制度的に保証されていない。政権が長期化するにつれて、汚職や腐敗、縁者びいきがはびこり、投資の停滞、能率の低下が起こり、次第に民衆の支持を失い始めた。

一党制から複数政党制への動きは、社会主義の放棄、市場経済や混合経済への政策転換と連動している場合が多い。東欧の民主化の動きが情報網の発達によって頻繁に伝わるようになり、人々の間に民主主義、自由経済への期待が高まった。

援助疲れと飢餓の原因

援助しても、援助しても減らない難民の数、繰り返される干ばつ、いっこうに良くならない飢餓の状況。援助し続けている大国には『またか』という苛立ちが起こり始めている。

アフリカの飢餓はいくつもの原因（内戦・干ばつ・社会システム）が絡み合って、しかも国外の力も加わって複雑化している。内戦状態の対立するグループにそれぞれ武器を売っている「援助国」があることを忘れてはならないし、干ばつも見一見天災で防ぎようのない様に見えるのだが、それだけが即「飢餓」の原因と決めつけられない。干ばつの続く地帯のすぐそばで豊かに穀物の実る風景は少しも珍しくない。けれどその作物は決して彼らの口にはいることはなく、都市または国外へ「産地直送ルート」に乗って運ばれてしまう。そうして得たお金で彼らは武器を買い…と悪循環が続く。目に見える援助の成果だけを目指すのではなく「援助」のあり方～アフリカとアフリカを取り巻く国の根本的な姿勢を問いただす時期にきている。

（江原宏昭，尾関葉子）

エチオピア支援バザーへのご協力ありがとうございました

8月25日、エチオピアの活動を支援するバザーが横浜と行田（埼玉）で行われました。JVC 神奈川から124万円、行田だんべ祭りのチャリティーバザーから45,000円の寄付がありました。これは、エチオピア、マーシャ村の農村復興活動に使われます。

私たちの暮らしの中のアフリカ

アフリカというと野生動物、飢餓、そしてアパルトヘイトと、重要ではあるけれども抽象的で難しいイメージしかわかない私たちですが、暮らしの中に隠れて、しっかり私たちの生活を支えているアフリカがあります。そんなアフリカを少しばかり掘り起こしてみました。

日本との貿易の関係では、南アフリカが大きな位置を占めています。南アフリカにとって日本は、アメリカに次ぐ、第2の貿易相手国なのです。

南アフリカを中心に希少金属の輸入が多いのは、資源の少ない日本としてはうなずけるところかとも思いますが、最近では農水産品の重要性が高まってきています。

ガーナといえば国名というよりもむしろチョコレート製品名としての知名度の方が高いかもしれませんが、それもそのはず、チョコレートの原料となるココア（加工されたカカオ豆）の39.1%がガーナから輸入されています。ところで、このココア輸入、数量としては10年間で1.8倍になっているにもかかわらず、金額は4分の3に減少してしまいました。これは、国際コーヒー機関が1989年7月にコーヒー、ココアの輸出割当性を停止し、取引を自由競争にしたために、コーヒー、ココアの国際価格が大幅に下

落したためです。

コーヒーは、エチオピアをはじめケニア・タンザニアなどから輸入されていますが、中でもアラビカ種と呼ばれるエチオピア原産のコーヒーは、高品質で知られ、世界のレギュラーコーヒーの70～80%を占めているそうです。日本ではモカ・コーヒーとして知られています。

水産物については、日本人の消費するエビ類の80%、たこ種の60%、ヒラメ・カレイ種、カンパチ、ウナギの約50%が輸入物でしめられています。表2に見られるように、タコ、イカ、タイの多くがアフリカから輸入されています。タコは総輸入量の90%がアフリカからの輸入で、このうちの70%以上がモリタニアから来ています。イカは総輸入量の80%近くがアフリカからの輸入で、そのうちの30%がモロッコ産です。ケニアからの魚（冷凍）の輸入が高い金額となっているのは、ビクトリア湖に面したキスumu市に日系漁網製造会社があり、淡水魚であるナイルパッチの冷凍切身の対日輸出を行っているからだそうです。

水産物の大量輸入は、日本の漁業に与える影響が大きいばかりでなく、相手国の資源乱獲、自然破壊、市民生活の犠牲をもたらす恐れがあることが指摘され、特に東南アジアに関しては議論の対象にされる

主なアフリカ諸国と日本の貿易（1990年）

（表1）

国名	輸出品名	金額（千円）	輸入品名	金額（千円）
エジプト	ゴム空気タイヤ	3,668,282	石油（原油）	3,065,592
	貨物自動車	3,638,182		
	蒸気発生ボイラーの部品	1,411,089		
スーダン	貨物自動車	1,392,071	実綿及び繰綿	3,465,013
	乗用自動車	561,552		
ガーナ	貨物自動車	2,324,300	アラビアゴム	1,015,157
	原付自動車及びモーターサイクル	324,289		
ナイジェリア	輸送型乗用車	1,925,365	カカオ豆	7,656,221
	フラットロール	2,307,099		
エチオピア	ゴム空気タイヤ	1,328,328	いか（冷凍）	929,707
	合成繊維・長繊維の糸	253,259		
ケニア	貨物自動車	3,421,021	揮発油	1,209,556
	電話交換機	1,477,292		
南アフリカ共和国	ピストン式圧縮点火内燃機関	17,826,568	えび及びかに（冷凍）	320,341
	（エンジン部品）	4,463,059		
			羊革	2,184,866
			コーヒー	4,611,102
			魚（冷凍）	684,551
			ナッツ	401,599
			フェロクロム	22,159,952
			とうもろこし	20,740,104

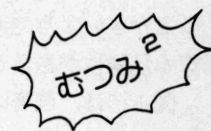
日本貿易月表

さてレザー・ジャケットなどおしゃれな革製衣類の主力原料である羊皮は、日本はほぼ全量を輸入にた

(石井ちえみ、江原広美)

伊谷純一郎他監修 平凡社

またまた JVC の元気三人娘登場



みんなの“信じられる人”になりたい

「世界に目を向けなさい」高校3年の時だった。母校で犬養道子さんの講演を聞いてショックを受けた。

これがきっかけとなり、校内の有志が集まって国内に住む難民の人々と交流。早織さんはこの活動のかたわら、JVCのミーティングに参加したり、難民定住促進センターを訪ねたりした。

2年前、会の代表として現地視察のためタイ・スタディーツアーに参加した。「スラム、農村をまわって、私のカメラ、ノートには人々の悲惨な姿がいっぱいつまって帰ってくる予定だったんです」それが、行って、見て、レンズでは子どもたちの笑顔にくぎづけされた。「スラムでゴ

木山早織さん

ミ拾いするこの子どもたちのこの元気はいったいなんなんだ!？」小さくても稼いで家族を助けている誇り、自信、家族、地域のつながり……豊かさはモノからは生まれてこないんだと改めて思い知らされる気がしたという。

早織さんは今、大学福祉学科の3年生。1年休学してのパナニコムスタッフとなつた。

「キャンプの人たちにとって、私が初めて出会う「日本」です。だからみんなの“信じられる人”になりたい。日本語をうまく教える以上に互いの関係を大切にしていきたい。まず、私が信じる。これですね。とび込んでいくだけです」。



最初の仕事はカレンダー

「今年のカレンダーもなかなかいいでしょう。ともだちにもすすめてね!」パンフレットを配るテキパキした明るい声が事務所に響きます。今年、カレンダーを担当する赤阪むつみさん。歴代四代目。またまた“元気な人”の登板です。

赤阪さんが第三世界に関心をもつようになったのは高校1年の時、ネパールで長年活動している医師を訪れてから。「ネパールで出会った人々は皆幸せそうに見えたんですね。なんにもないのにホントに幸せそう。なぜ? とても思

赤阪むつみさん

議だった……」

フィリピンに留学、休みに帰国するたび NGO をまわり、ついに JVC に落ちついた。「今、とても楽しいんです。ここにいると人から得るものが大きい。将来は、専攻した農業、生態学も生かしていきたいです」

26歳。「JVC に来る人は、見た目若い」の定説をまたまた実証してくれた赤阪さん。持ち前の明るさ、強さで、莫大なカレンダー事務が今年もトントンと運んでいくでしょう。



カンボジアのとりこになった

この8月、念願のカンボジアへ赴任する大西睦美さん。大西さんは以前からカンボジアには特別な思い入れがあったそうだ。そのきっかけになったのは、学生時代読んだ一冊のルポ。戦下にありながら、たくましくゆったりと生きるカンボジアの人々、くらし……「戦争なんてどこ吹く風、力をぬいたほんとうの底力みたいなものが感じられたんです」。

国連の専門機関に勤め、各国のエリートと接触をもちながら、もっと民衆に触れたくて、ときどき JVC でボランティアをしていた。そして、「カンボジアで働き

大西睦美さん

たい」とデモンストレーションしていたとか。そんな大西さんの熱い情熱=ネバリが通じて、今回のカンボジア行きが決定。(JVC ではなにごとにもネバリが一番とか!?)

「不安? そりゃいろいろあります。でもそれより期待の方がずっと大きい。なによりカンボジアの人とがっちりふれあうこと、それが楽しみです」。

カンボジアの織物を使って、自分で作った上着がよく似合う大西さん。カンボジアでも情熱とネバリでがんばってください。(荻野洋子)



JVCプロジェクト

1991年7月25日現在

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～8時 毎月第2, 4土曜日 午後2時～4時	岩崎駿介(代表) 林 達雄(事務局長) 熊岡路矢, 星野昌子, 前川昌代, 山口誠史, 鈴木由子, 今泉 恵, 富安光子, 富安庸太郎, 柴田久寿子, 小野豪大, 江原浩昭, 赤坂むつみ, 高梨直樹	全国社会福祉協会
JVC神奈川	5月より開講した「第三世界理解講座」は盛況のうちに終了した。今後JVC神奈川として定例化していく予定。 8月25日のエチオピア支援バザーの準備をしている。 ●定住難民プロジェクト 7月13日, かながわ女性センター(江の島)にてカンボジア料理の会を行った。鎌倉腰越小学校のPTAを中心に約40名が参加した。 7月13日, 東京都主催のシンポジウム「難民とは」に岡村達司が講師として参加。 7月14日, JVC神奈川にて定住難民プロジェクトのボランティアミーティングを行った。	清水俊弘 岡村達司, 他約50人	ジャパン・タイムス, 神奈川県福祉部, 禅林寺龍華会基金, ケアハウスさくら苑, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会
環境 タイ (チャイヤブーン県)	農民たちは果樹を中心に作物の間に樹木の植えつけを行っている。 ●植 林 モデル農場ではバングラデシュから農業技術者の村上真平氏を迎え, 土壌流出防止のための土留めを作った。	岩崎美佐子, Komain Soongsumalaya, Kasemsan Sriwattana, Prasit Ingo, Chalaem Kaewchoho Somrak	庭野平和財団, YOKE ジャスコ
調査・研究	- 東南アジアの森林破壊と換金作物についての研究 - 人間居住キーワード辞典の作成	東村康文	FASID 国土庁
イラク	6月には, 医師をバスラ, バグダッドに派遣し, 医薬品援助をするともに医療状況を調査した。また, 神奈川県との協力により水道技術者2名をバグダッド, ヘラ, ナジャフへ派遣し, 水道施設を調査した。 現在は6月の調査結果に基づき, 医薬品, 粉ミルク, 塩素等の援助の準備をしている。	柴田久史, 船川秀夫, 寿賀一仁	全日本自治団体労働組合(自治労), 神奈川県800万県民による湾岸戦争被災民等への支援募金, テレジア会,

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
エチオピア 東ゴジャム州 ビチュナ ショワ州 ゴディノ ダロチャ アジスアベバ	●マーシャ村復興プロジェクト再開 内戦のために約2年中断していたマーシャ村での農村復興活動の再開が決定した。マーシャを含んだ4カ所での調査の結果、一番援助を必要としていることや農民の自発的な意欲が芽生えていることなどからマーシャを選んだ。現在、エチオピア人スタッフを中心に、農村の状況把握、役所との交渉を行っている。 10月の初めに日本からも関係者がエチオピア入りし今後の方針、活動の具体的内容を決める。	山田 盛、田尻真由美、 Solomon, Shikur, Ali, Yodit, Tekleyohannes, Burahane, Amudu Gabreamruk Baiye	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動、モラロジーMIRC、立正佼成会、西本願寺、東京グリーンウォーク、メサイヤコンサート、エチオピア支援バザー、ほか
ベトナム ホーチミン市 ハイフォン市	●地域総合復興（南部） 2年目に入り、①第8区の障害児童のための活動、②居住環境の改善のための活動、③ビンチャン郡における移動保健医療活動の調査計画に参加している。あわせてホーチミン市および南部における帰還民へのプログラム実施のための調査を行っている。 ●地域総合復興（北部） 洋裁、電気のコースは各々第2期に入り、自動車修理のクラスは9月に開講する予定である。	熊岡路矢、中野周二、 稲見 圭、稲見由美子、 久保英之、久保早恵 〔南〕 ホーチミン市住宅局 第8区人民委員会/社会福祉ビンチャン郡人民委員会 〔北〕 ハイフォン市労働局	（南） 庭野平和財団 立正佼成会 メサイヤコンサート、JVCカレンダー （北） UNHCR
カンボジア プノンペン市 カンダール県 バンティミエン チェイ県	●サンタビエップ技術学校/ワークショップ 日本からもってきた自動車整備の教科書のカンボジア語訳が進んでいる。上巻をバンコクで印刷・製本して第四期コースの開始に備える。第四期は91年9月より開始。学科・実技の両方の訓練を受ける生徒を25人、学科のみの受講生を15～20人を募集する。 ●母子保健 カンダール県内7郡及び県都の村々の助産婦・伝統産婆の技術向上訓練を続けている。妊婦検診により、出産時に異常が予想される妊婦を早期に発見できるようにするための訓練である。 プノンペン郡で合計12カ所の村の診療所を改築する。既に4カ所で着工し、その内1カ所で完成した。 ●井戸・ため池作り プノンペン郡で川や湖が近くにない深井戸も掘られていない村を選び、村人の手による浅井戸やため池作りを助ける。古い浅井戸でセメントリングが壊れたり、穴が石などで埋まったり水位が下がって水が涸れてしまったりしたものを修復する。 また、家畜の進入を防ぐための柵がなかったり、池の水をきれいに保つための手入れができていないため池を使えるようにする。古い浅井戸やため池もない村では、新たに掘る。 ●国内避難民への緊急援助 カンボジア北西部バンティミエンチェイ県シソボン郡に戦火を逃れて避難している人々が稲作ができるよう助ける。6月に40ha分の浮き稲の種まきに必要な費用を援助した。	古西 勇、馬 清、 本橋 栄、竹井潤子、 飯島かんな、鈴木琴子 「現地の実施機関」 自動車輸送公社(運輸省) 母子保健局(保健省) カンダール県保健委員会 プノンペン群保健事務所 バンティミエンチェイ県 国内避難民委員会(農業省)	創価学会青年平和会議、モラロジーMIRC、立正佼成会、日産労連、西本願寺高岡寺族青年会、毎日新聞大阪社会事業団、浄土宗東京教区青年会、国際保健協力市民の会(SHARE)、四日市商業高校、JVCカレンダー、カリタス・ジャパン、真如苑、メサイヤコンサート

活動地名	活動内容	担当者	支援団体
ラオス ビエンチャン市 ビエンチャン県 ボーリー・カム サイ県 カンムアン県	●生活改善普及員養成プロジェクト 保健衛生、農業、教育など生活全般の改善に携わる女性の生活改善普及員を養成すると同時に、普及員の地域開発活動を支援している。 ●7月25日、JVC、UNIFEM、ラオス女性同盟の三者会議がラオスの関係各省庁（農林・保健・教育・外務・対外経済）を混じえて開かれた。昨年のプロジェクトの反省と評価、さらに今後6カ月の活動計画の提案がなされた。 ●伝統織物保存 11月初旬に行われる伝統織物展示会に向けて、主要産地で収録したビデオの編集、展示用織物のデータ整理が進められている。JVCはその資金提供を行っている。	磯田厚子、北詰秋乃、 Thanongsi Solankum Maliphet Sukkhasume （ラオス女性同盟） Khamone Phetdao- heuan, Khampone Saignavong	UNDP, UNIFEM, RIJ, NVC, 聖ヨゼフ老人ホーム、難民と地球の緑を考える会、グループ・カンガルー、ジャパン・タイムズ、メサイアコンサート、JVCカレンダー
タイ バンコク	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、ラオス・カンボジア・ベトナムを含む、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動、④在タイ日本人との連絡調整 ●奨学金プロジェクト 家庭訪問、学校訪問を行い、小学生70名、中学生17名に奨学金を支給した。 ●クロントイ図書館 図書館前の開き地に運動場を作っている。 シンナー、ヘロイン防止の掲示板を作った。	Pornpimol Chaiboon, Kamol Mingmuang, Manas Torkan 池島千津子、主婦ボラン ティア15名 Samruay Jongyork- lang	全国社会福祉協議会 メサイアコンサート Tree for life の会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、からし種モラロジーMIRC、国際ソロプチミスト山形、山形中央ライオンズクラブ、太田慈光会
カオイダン （カンボジア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 かじ屋及び大工コースで作られる農具類を、カオイダン内の他団体（YWAM）の農業プログラムに活用させている。	Somyot Rattanatham Sutthi Netprakhon, 井本勝幸、井本美奈	UNHCR, SV(Stichting Vluchteling) 山形日産、日産労連
バナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 7月11日にラオス第2グループが出発。それに先立って2日に最終試験、3日にフライトオリエンテーションを行った。 17、18日、日本政府の調査団がラオス難民の日本定住希望者149人を面接した。	竹村雅義、蘭牟田浩美、 鈴木彰子、木山早織、 大槻和弘、Krisda Chunlasevo	IOM
ブリラム県	●農村開発 今年から新しく対象に加えた6村にて情報収集、JVCの活動の紹介を行った。	Thongkham Sumru- engram, Chowarite, Duangprom	モラロジーMIRC、 JOFIC, JVC カレンダー

JVCの活動とその目的に御理解を

▶ **JVCとは**—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶ **JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。会員の種別と年会費は以下の通りです。また会費には機関誌の購読料が含まれています。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 学生会員 3,000円
団体会員 30,000円)

▶ **機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

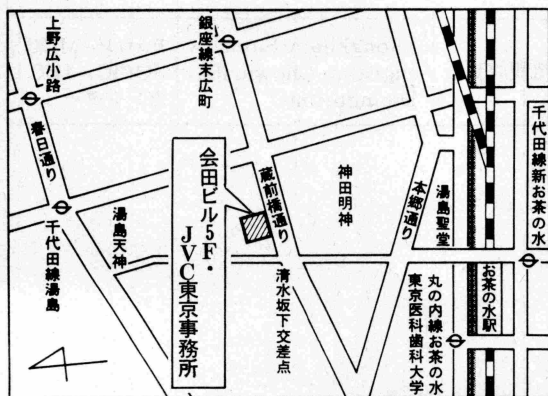
- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい)

編集後記

▶ エチオピアの片田舎マーシャ村。電気も水もソフトドリンクさえも無いこの村で、「希望」の芽が膨らみ始めた。JVCが離れてから2年弱、村人たちはしたたかに、忍耐強く苗を育て、泉を守った。「デモクラシー」が合言葉になっているJVCエチオピア人スタッフたちは、農民の中に「民主化の意欲」を感じている。民主化の嵐がアフリカを覆う中で、この周辺の片田舎がどうかわるのか、3000年の歴史の重みがどう作用するのか、じっくり腰をすえて見ていこう。(江原)



▶ **みなさまの募金を支えるJVCの活動**—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. **アフリカ難民募金** (7月小計 166,724円)
アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. **グリーン・フォー・アフリカ募金** (7月小計 831,181円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. **カンボジア募金** (7月小計 28,000円)
カンボジア国内の復興のために使われます。
- D. **タイ募金(奨学金・スラム・農村)** (7月小計 217,000円)
タイの人々の生活向上のために使われます。
- E. **ラオス募金** (7月小計 203,822円)
ラオスの生活改善プログラムに使われます。
- F. **ベトナム募金** (7月小計 79,000円)
ベトナム帰還者及び国内復興のプログラムに使われます。
- G. **定住難民募金** (7月小計 575,144円)
定住難民のための日本語教材費と家庭訪問員の交通費に使われます。
- H. **環境募金** (7月小計 262,000円)
タイ山間部で、環境を守るためのプログラムに使われます。
- I. **JVC運営経費募金** (7月小計 4,000円)
現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. **無指定募金** (7月小計 899,632円)
▶ **送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい)
加入者名—JVC東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (7月小計185名 1,958,178円)
犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

Trial & Errorは再生紙を使用しています

1991年8月20日発行 (毎月20日発行)

編集人 江原浩昭、前川昌代

発行人 林 達雄

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC) 東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎03(3834)2388 FAX: 03(3835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (助)神奈川県国際交流協会内
☎045(671)7082

印刷所 株式会社・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。